

ベストセラー

梅野夜 遊内

「私を助けてほしいんです」

そう言っただけで現れたのは巷で噂のP.S.だった。艶のある黒髪に白い肌、細い体である彼女の最も魅力的なところは、静かに周りの色を吸い込むかのような深い紫色だった。今日はいつものセラー服ではなく、白い肌でより一層目立つ黒のワンピースを着ていた。

「わかりました。では、要件を伺いましょう」

私はいつものように笑顔で彼女に言った。しかし、それは心からの笑顔ではなかった。私のところに来る人たちが言うことは必ずといっていいほど同じことを言う。正直千回は余裕で越えているんじゃないかと言っている。ほんだ。だが、それを相手に悟られてはいけない。私は彼女の目を見つめる。すると、P.S.は言うのを少し躊躇った。私から視線を外し、斜め上を見て何か考えているようだ。しばらくして彼女は深く深呼吸をして告げる。

「自由になりたいんです」

その言葉にやっぱりと思う。しかし、私は変わらず笑顔で頷き、

「自由……ですか。理由をお伺いしても？」

私がそう聞くと、P.S.は顔を縦に振りそう思った経緯を話し始めた。

「あなたもわかっていると思います、私の仕事は人気

が出れば出るほど同じ世界に閉じ込められてしまいます。私はもう疲れたんです……」

彼女の目には涙が溜まっていた。相当きているのだなと思っただけで私は白衣のポケットからハンカチを取り出し彼女に渡す。P.S.は感謝の意を述べると涙を拭きとった。

しかし、涙は次から次へと出て、ついには溢れてしまった。必死で止めようとハンカチを押し付ける彼女に私は、「急がなくて大丈夫ですよ。今のうちに泣いてすっきりさせちゃいましょう」

そう、これは何度も見た光景だ。こうすれば、そのうちもっと深い理由を聞くことができるはずだ。

\*

「ご迷惑をおかけしました。これ、洗ってお返ししますね」

P.S.は丁寧にハンカチを畳み、鞆にしまう。私は彼女が落ち着いたのを確認する。それにしても、最近の子はすぐに仕事を辞めると言うが、その職に就いた以上そうなることはわかっていたことだろうに。今回もそうだ。まだ新米なのにもう辞めたいときた。正直説教をしてやりたいところだが、ここに来た以上、覚悟はできているのだろう。

「それでは話に戻りましょう。あなたは自由になりたい

と仰いましたが、今を乗り越えれば新しい世界に行けるはずですよ。きっと今の気持ちからかわるのでは？」

もしかしたら考え直してくれるのではないかと願いながら聞く。といつても、今まで変わった人はいないが。「確かにそうですね。ですがそれは早くても一年はかかるでしょう？ 私はそこまで待てる自信がありません。

いえ、もう無理です」

先ほどまで落ち着いていた彼女はまた涙を流し始めた。私は彼女がここまで追い詰めた理由について心当たりがあった。

「……L.S.のことですか？」

私の言葉に彼女は耳を塞ぎ、目を瞑った。当たり前だ。

「もう嫌なんです。彼が死ぬところなんて……見たくないんです……」

彼女が限界を迎えていることはよくわかった。もうこれ以上聞いても意味はないだろう。

「それではも……」

私がいつもの台詞を言おうとすると、あの光景がフラッシュバックした。

「っ！」

目の前で人が消える。消える。消える。皆笑顔で消えていくのに、誰かの悲痛な叫びが聞こえる。耳が痛い。千切れるほど痛い。最後にはいつも細かく破られた紙が落ちている。忘れたはずなのに。辛いだけだから。要ら

ないものだから。でも、さつきから思い出していたんだ。こうなるってわかっていたじゃないか。それにしても、あの声は誰なんだ？

\*

あれから三日が経った。P.S.は私の様子を見て帰っていった。嬉しいようでも悲しかった。結末はわかっている。あとは私がどう覚悟を決めるかだ。いい加減慣れなければ。

「失礼します」

診察室の扉を開けて入って来たのはP.S.だった。今日は白のシャツに青のスカートを着こなしていた。確かこれは……。私が服をじっと見つめながら考え事をして

いることに気が付いた彼女は、「これは私が初めて仕事をした時の服装なんです。そして、初めて彼に会った時の服でもあります」

彼女は苦笑いで言った。服はとも明るいのに、彼女の表情は暗かった。……もうタイムアップか。

「もう一度確認をさせてください。本当に自由になりましたね？」

本当はもう一つ言いたいことがあったが、言わなかった。言っても同じだろうし、むしろ言ったら喜ぶかもしれない。

「はい」

彼女は真つ直ぐ私を捉えて言った。私は深く深呼吸をする。何度も何度もやってきたんだ。もう大丈夫なはずだろう？

「それでは始めましょうか。大丈夫です。すぐに楽になりますよ」

私は彼女に言う。自分に言い聞かせる。この後起きることはいつもと同じだ。何も辛いことはない。ないはずなのに、

「あれ？」

目が熱い。体中が熱い。もしかして暖房でもついているのか？

「先生は優しいんですね」

そう言つて彼女は私にハンカチを差し出す。それは彼女のハンカチだった。なるほど、私は泣いているのか。

「先生のハンカチはこの袋に入っています。本当にありがとうございます」

彼女は深々とお辞儀をする。とても奇麗だった。私の目からはさらに涙が零れ始める。私は泣き虫だなあ。

「先生は私が、いえ、皆が自由になることを止める理由はわかります。私も理解しているんですよ。これは私だけの問題ではありません。とても大きな問題なんです……」

彼女の目からも涙が流れる。私は彼女から渡された袋

からハンカチを取り出して渡す。

「……よかったら持つててください。私にはあなたの物を返すことはできませんから。交換です」

それを受け取ると彼女は今までにないくらい笑顔の私に向けた。

「ありがとうございます。大事に持っていますね」

ハンカチをぎゅつと握りしめる。自由なんて言葉がなければこのようなことは起きなかった。だが、それは私を楽にするだけであり、彼女たちを救うことはできない。きつとつまらない本と同じようにすぐに捨てられてしまうだろう。

「では、少々お待ちください」

そう言つて私は診察室から出て、別の部屋に移動する。そこにはたくさんのお本が並んでいた。大昔の本から最新の本まである。私は入つてすぐのところにある本を一冊抜き取る。そして、一通り内容を確認する。もう見かけることはないだろう。そう思うと、どこかに隠してしまいたくなるが、彼女を救うためには必要なアイテムだ。私はそれを持つて部屋から出る。

「お待たせしました」

彼女は私を見て笑顔を見せる。目や鼻が赤くなっていた。どうやら私が来る少し前まで泣いていたようだ。きつとMSや仲間のことを思い出していたのだろう。

「では、私の前に立つてください。楽な体勢でいいです

よ。……始めに言っておきますが、私の愚行をお許しく  
ださい」

そう言うとき彼女は首を横に振る。

「愚行だなんてとんでもありません。先生のしているこ  
とは救いです。これで先生の気持ちを晴らすのは難しい  
でしょうが、私はとても感謝しているんです。私たちが  
救えるのは先生だけですから」

泣くな。きちんと前を見ろ。

「では、何か他にやり残したことは？」

「ありません」

きつぱりと答えた。もう、覚悟を決める自分。材料は  
持っているだろう？ あとはそれを……。

「さあ、その本の頁を破いてください」

\*

あれから一週間。診察室には細かく刻まれた紙が落ち  
ていた。机の上にはA.S.のハンカチが置いてあった。喉  
がひりひりする。ほとんど何も口にしていないというの  
もあるが、きつとあの時泣き叫んだからだ。そう、あの  
声の正体は私だったのだ。

——私にしたことは罪だ。人殺しと同じだ。いくら誰か  
が仕方がないことだと言っても私はそうは思はない。

A.S.が消えた後、Y.S.も仲間も消えた。この世界での  
自由とは存在を消すこと。依頼人だけではなく、同じ作  
品に出ている人は皆忘れられる。いくら私が詳しく説明  
しても誰もわからないだろう。本の頁を破るとはそうい  
うことだ。

「誰かこの汚濁した世界を変えてくれないか」

私は〇〇に懇願した。だが、この世界が変わることは  
ないだろう。だって、

——あなたたちがいるのだから。